



Title	己巳残愁録
Author(s)	中井, 木菟麻呂
Citation	懷徳. 1932, 10, p. 34-44
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88861
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

己巳殘愁錄

中井木菟麻呂

懷德堂改修の計畫

明治二年己巳、それは大阪懷德堂が創立後百四十四年、余が生れて十五年目、時代の推移に伴ひてさしせまりくる衰運を何如ともすることかなはず、千載の恨を留めて校舎を閉鎖した年なのである。子供心に銘刻せられたる愁痛やるせなき情緒は、年長じても諦めること能はずして、大阪の後繼市民に對する慨歎となり、重建懷德堂の企となり、やがては先哲奉祀の發議となり、懷德堂記念會の創立となりて、茲に積年の愁恨を銷す事を得たのであつた。

後一年を隔てたる明治二年には壊滅に歸すべき運命に逢着して居るとは、神なりぬ身の知るよしもなく、寒泉と桐園とは、懷德堂の規模を恢弘して、先業を隆興せしめむ事に熱中し、廣く同志と謀りて、東、心齋橋筋に至るまで、學校の敷地を廣め、竹山の寛政再建當時には聖廟をも建設するつもりで、其繪圖面をも引かれたまゝで、建設費節減の爲にできない事になつてゐたそれをも建造して、先人の遺志を繼ぐ筈になり、前のごとは又別に趣を易へて、中央に聖廟を築く計畫を立て、その設計圖が

數通できてゐたのを覺てゐるのだが、桐園の歿後、其圖面が懷德堂舊藏の十千書筒の丙函に藏められてあつたのだが、書筒六函を騙取せられた中にあつたので、今は家に存してゐない。五六年前、その圖が某家の賣立に出た事があつたが、何人かの手に落ちたといふ事を聞いて残念に思つた。

學校改修事業は如何なる動機がありて發議に及んだか、當時將軍家茂が在府中であつたので、其便宜を以て出願の手續に及ぶ筈であつたのか、確なる事は聞いてゐないけれども、寒泉翁の居諸録文久三年五月二十八日の條を見ると、當時の城代松平伊豆守が寒泉、桐園に向つて、懷德堂の結構は未だ弘大でないやうだから、講堂を恢拓して、城代奉行等にも講席に列らせるやうにしてはどうか、將軍にもその思召があらせられるやうだ、といはれた事があり、又慶應二年十二月五日に、會津藩在京の醫師高橋順甫から、中川宮にも懷德書院を恢弘する思召があらせられて、内旨を公用人に漏された事を報じて、書院の記録を求められたので、寒泉欣然、男尙一をつれて北上し、宗家並河尙教と上疏の草案を作り、又尙教より懷德堂事疏を賀陽宮に奉呈した事もあつた。此の事件に關しては、懷德堂考附錄の懷德堂年譜に詳述しておいたから、茲には之を略する事とする。後から見れば、實にはかない計畫であつて、寒泉、桐園の歡喜も水泡に歸して、其失意いかばかりであつたかと思ひやられて、幻滅の感に勝へない。

當時又寒泉桐園の名義にて、大阪奉行所に嘆訴して、學校は建設當初の趣旨に基きて、人才を教育

する第一の場所なれども、如何せん米價高直になりて、貧生等の手當も行届き兼ねる故、何卒憐察を賜はりて、永續の手當を成し下されたい、との願書を出したけれども、固より幕政も破滅に瀕して事故多端なる折柄であつたから、聞き届けられさうな筈もなく、遂に不可能の旨申渡されて、極後の悲愁に陥りたる事もあつた。

明治元年の春、大阪御親征の際に、山階宮晃親王殿下が突如懷德堂に貢臨を辱うし、謁を寒泉桐園に賜うた事があつて、實に書堂最終の光榮であつたが、一年度後に迫る否運を如何ともする事はできなかった。

悲慘なる懷德堂の末路

懷德堂の財政は先代碩果が儉勤蓄積の餘澤もあり、又同志中の助力もあつたので、弘化嘉永の頃までは、さして窮迫といふほどでもなかつたので、文庫の建立や逸史の出版等もできたのであり、安政の頃には、同志中に永續助成金の約定ができて、安政六未の年から亥年まで向ふ五年間、平瀬市郎兵衛の名義にて、銀四拾五貫目^{内三十貫目宗十郎より十五貫目市郎兵衛より}白山彦五郎から銀貳拾貫目を無利息にて用立て、元銀は直に債權者が預り置き、之に月五朱の利子を付して、其年限中、毎年十一月に渡され、満期の上元銀を返済する事に定められてあつたが、文久以後になりては世態惡化し、物價高騰して來たので、廣

大な校舎を控へて、中並二家多人数の衣食を辨ずるは容易の事ではなくて、困窮の状態日に益切迫して、他に財源を求める途も無かつたので、桐園は己むを得ず土藏二戸前を啓きて、藏書藏幅家具什器を鬻ぎて、窮阨を支へてゐたのであつた。

文庫中の藏書は、毎年曝書の際に見る事ができるのだが、家具什器類は、平時には絶てて出した事のない品のみにて、始めて目に觸れる物ばかりが、賣られる爲に處せまきまでに並べられたのを見て何となうなさけなきこゝちのしたのを記憶してゐる。

廢校間際である己巳十一月になりては、逸史を始として、詩律兆、非物非徵、瑣語、質疑篇の板木が、書肆加賀屋善藏河内屋吉兵衛に金七拾五兩にて賣却せられ、通語の板木が金拾兩にて天満屋善九郎に、社倉私議の板木が金壹兩にて河内屋吉兵衛に賣渡された。

拓本の板木は、自分の覺てゐる者では、竹山履軒執刀手鐫の萬安渡石橋碑、王陽明の大書、道風の安幾波起帖の刻板後に伊藤介夫氏の手に歸す等があつたが、人手に渡りて後は、多くは破毀せられてしまつたであらう。不思議に残つて、今に愛藏してゐるのは、朱文公の四訓、萬年の紫煙帖、道風の道澄寺鐘銘の三種である。

碩果一代に蓄積した圖書什器が一朝にして散逸する事となつたのは痛惜に堪へない事であるが、末路の否運如何とも致方がなかつた。桐園は書院の經營に力を致し、先業維持の爲に勞を吝まなかつた

のであるから、好みて家傳の書器を鬻ぐ筈はないのである。此の間の苦衷は、局に當つた者でなくては測度する事はできない。

教授寒泉翁は専ら學藝教授の任に當りて、理財の途にたづさはる事なく、懷德堂の財政窮迫して、匡救の道なきに至つても、一に桐園の料理に任せて、殆ど關心せざる者のやうであつたから、桐園が書器を鬻ぐ事を聞いては、先業保護の任を竭さない者として喜ばれず、賣却書籍中に竹山の題簽でもある者が見當れば、竊に書林から買ひ戻して、寒濤樓並河氏の樓號の藏書とせられた。此等の書には左の詩が題してある。

及泉盡鬻書。況存祖手迹。翁兮馴書肆。償供寒濤籍。

書物に書きつけられたのは是の詩文であるが、示及泉として作られた詩が十四首あつて、其内鬻書に關する者に左の五首がある。

懷德堂成百冊霜。書函充棟庫中藏。勿忘石窩先子績。囊底雖空烏付商。其四

承宗螟子是誰恩。書帙瓶罍遺澤存。一旦強拋貧窶補。何顏奉祀祖先魂。其六

諸藏所有粥胡難。世守清貧備物難。胸手沈思後嗣事。其如幹疊子孫難。其七

石窩先子受庠年。囊底纔餘八十錢。多歲儉勤功較著。庫中書器趁時全。其八

螟子勿忘來繼家。腹心存實豈描瓜。一紙半錢歸自有。即睽奕世祖先科。其九

寒泉の手に買ひ戻された者は幸に散逸を免れたから、その先業を擁護せられた恩恵は感銘に勝へない次第であるが、桐園鬻書の苦衷も亦眞に骨を削るやうな思であつたことを忘れてはならない。但兩者の意思が疏通せないで、寒泉をして不快の念を抱かせたのは返す／＼も遺憾である。此の間の事情に通じてゐた者は、己むを得ない事として、桐園に同情を寄せてゐたのだが、當時桐園が若し廣く同志や親戚等と謀りて、運用宜しきを得たならば、たとひ書器を賣り盡しても、書院の維持は如何にか立つたであらうに、と痛惜する者もあつた。

家藏の書器は多く散逸したのであるが、それでも懷德堂を引き拂ひて本庄村に移る時には、尙運搬に廿八日を費し、土藏に入れ切らぬ者は一二の親戚に預けた位であつた。其後盜難にかゝつた衣類もあり、賣却した者もあつて、現存してゐる者は幾何もない。唯貴重品として先哲手澤の遺書類が残存してゐる己である。

懷德堂退轉間ぎはに、余の記憶に深き印象を残したのは、表具師が書院の欄間をはづして、其兩面に張りつけてある宋六君子の圖を網形透彫の縁から切り離してゐた事である。非常に惜しい心持がしてゐたが、併しその圖や、同時に剝がした懷德堂記の額などは、幸に今にも遺物中に保存してゐるからよいが、講堂の大襖の鴻漸の圖はどうなつたのか、残つて居らない。玄關の式臺に入德門の額と共に、昔の懷德堂五舎の一なる桃舎の額が抛り出されてあるのを見たが、それはどうなつたかわからな

い。入徳門の刻額は、懷德堂の刻額と共に、本庄の家塾にも掛けられてあつたが、今は只入徳門聯が残つてゐる丈で、門額の所在はわからぬ。懷德堂の諸聯は、石切劔箭神社の木積家に其一枚が保存せられてゐる丈で、他は散逸してしまつた。懷德堂には四曲三對の大屏風があつて、それには石菴贅菴蘭洲春樓竹山履軒を始め、當代諸先哲の遺墨類が交張にしてあつたのであるが、書畫商がそれを解體して、持ち歸つた。其内の一枚であつた贅菴伏見懷古の詩は、青木嵩山堂の立賣に出たのを辻本謙二氏が落札して、家藏として居られる。

歷代祖先の手澤本は大抵保存せられてあつたのだが、廢校後も衰運の餘を受けて、困窮其極に達したので、七經逢原、七經雕題略、戰國策、漢書、後漢書、三國志等の諸書は、天満屋善九郎方に預けられ、取り出す事もできなくて父は歿せられた。以後天満屋から人手に渡つたやうにも聞いてゐたが明治廿一年の四月に七經雕題略其外諸書が書林淺井吉兵衛の手から、同年八月に七經逢原がやはり同書店から賣物に出た事を舊門人森訥の紹介にて買ひ戻す事となつた。逢原は古詩尙書缺本のまゝで金四拾圓、雕題略其他は廿五圓であつた。當時余は貳拾圓以下の薄給の身で、どうする事もできなかったで、所謂大蟲を活かす爲に小蟲を殺す類で、殘存の先哲遺墨類を甚しい廉價にて拂ひ、借金で不足を補ひなごして、漸く買ひ戻したのであつた。

戰國策は森訥氏の手に歸して、今は生谷卯兵衛氏の有となり、漢書後漢書三國志の類は伊藤介夫氏

の得る所となつた。

以上は言ふに忍びない事どもではあるが、懷德堂末路の窮迫が是れほどまでに及んでゐた事の實際を傳へおくのである。

懷德堂の遺跡

懷德堂は自ら廢絶するの己むを得ざるに至つたので、その地所建物共、油掛町の天満屋善九郎に金參百兩にて譲り渡す事となり、明治二年己巳の十二月廿五日に府北本庄村に引き移つたのであつた。その際寒泉翁は左の詩歌各一首を門扇に貼付して、出てゆかれた。

堂構于今百卅年
皋比狗續尙綿綿
豈圖王化崇文世
席卷講帷村舍遷

百餘り四十四とせの文の宿けふを限りと見かへりていつ

哀調凄切にして、多讀に堪へざる者がある。間もなく何人にかはがして持ち去られたとの事である。遺跡はその後多年間、元形のまゝにて空屋となつてゐたが、それから逸見氏の手に渡り、門牆を壊ちて長屋を建て、講堂其他は元形の儘區劃を施して、借屋となつてゐた。其後の消息は聞かなかつたが、何年頃にか全部を取り毀ちて、今の煉瓦造の高屋を見るやうになつた。

廢校後余は舊書堂がなつかしくてたまらなかつたので、その翌年の秋空屋に上つて見たら、己有園の中はごに、桐園の植ゑておかれた木芙蓉が主なき宿の秋を飾つてゐて、一入悲哀の情をそゝられた。

今の懷德堂落成式當日の告文の中に、

哀歌一闋。校門永闕。虛堂冥漠。柱楣傾欹。毀垣依舊。兀存老梨。秋華空開。發歎階砌。
と述べておいたがそれである。

書堂の記念として最印象の深いのは大木の老梨であつて、廢校後も昔ながらの姿を屋上高く見せてゐたのを、道ゆくたびになつかしくながめてゐたが、是もいつの間にか見えなくなつた。

堂宇の解体せられたのも、大方同時であつたらう、同じく姿を隠してしまつた。

懷德鄉庠人所宗。傳經六世若醇醞。絃歌百載流風在。漫壞虛堂聞磬鐘。

三四十十年を経たる後にも、尙夢に書堂を見るのは毎度の事であつた、その頃の作には、

絃誦無聞四十秋。門牆堂廡復何求。香壇執器猶隨聖。雲榻橫經屢夢周。家訓一言如寶玉。遺書千卷比精鏐。疎愚未斬先人澤。隻手應營五鳳樓。

廢校後の回想

幼少から深き印象を留めてゐた懷德堂の俤は、廢校後になりても腦裏を支配して、憾念諦めがたく何とかして復興ができない物であらうかといふ空想に驅られつゞけて、之を復興するは祖先より負はせられた吾が身の責任であるかのやうに思ひつめてゐたのであつた。そのやうな心で大阪を見てゐたから、大阪の人士は吾が祖先が大阪市民教育の爲に盡された事を忘却して、さる學校が大阪にあつた事すら知らないだらうか、と幾度歎息を漏らした事かわからない。尤或人々が懷德堂の再興を計畫し

てゐる、といふ噂が折々耳に入つた事はあつた。當時余は東京にゐたから、是は舊門人森訥氏から、時々報告して呉れたのであつたが、此等は吾が家を無視しての計畫であつたから、余も森氏も快くは思はないで、再興を謀るには、懷德堂創立の書類を必要とするが、是なくては偽懷德堂に過ぎない、といつてゐたのであつた。逸見氏が懷德堂を壊つた時、その遺材や學印の瓦を用ゐて、邸内に聖廟を造り、之を懷德堂と稱へてゐるといふ事も聞いてゐたが、何等の關係もなく、曾て往つて見た事もない。吾が再興の希望が文字の上に見られたのは、上山階親王書である。明治十八年、山階宮晃親王殿下が古稀壽筵を設けられ、明治天皇陛下の御臨幸遊ばされた頃であつた。余は祝壽頌禱の微衷を申上げ且往年書堂寵臨の殊恩を謝し奉る爲に書を上り、且拜謁を賜はつた事があつた、其書中に再興の希望を漏らして、

吾懷德書院自高祖創業。絃誦弗絕者一十有二紀。久安之勢。將至于无窮。然興之期既已竭焉。則頽廢不
回踵。是興廢之一變也。果且爲興廢之終乎哉。果且不爲興廢之終焉乎哉云云。雖然天運循環。否極則泰。
否何可長也。在易否之上九云。傾否。先否後喜。則今之廢。惡知非後之興邪。

といつてゐる。拜謁の際、殿下は、予は汝の志を嘉みす、若再興の計畫でもできたならば、何時でも申出でよ、一臂の力を假すといふほどの事はできないだらうけれども、應分の事はして遣す、この有難き御言を頂いた。

その後は明治廿六年に重建懷德堂意見五十條を作りて、書院創立の一百七十年、寛政再造の一百年である明治廿八年を期して、再興を企てた事があつたが、然るべき後援者もなく、方法も極めて拙劣であつたばかりでなく、或一のさはりとなつた事もあつた。それは、余は孔教を尊崇すると共に基督正教を信奉して、教育上に特殊の意見を立て、基督正教を経となし、孔教を緯とするでなければ、完備なる教育は成立たない、今の世に當りて、孔教己を死守して、他を顧みないものは、孔道の本旨を得た者でない、といふ意見を持つてゐたので、所謂認識不足の人々には、之を容るゝほどの器量を具へてゐなかつたので、遂に實行不可能の事となつてしまつた。

最後に自分から求めずして起つたのが懷德堂記念會の組織及公會堂に於ける記念祭典の執行であつた。記念會の成立に就きては、吾が家に交渉もあつたし、記念出版物の件に就いても、多少の相談を受けたのであるから、往年の再興計畫者の如き態度ではなかつたから、余も積年の希望が思ひがけなき方面から自然に起り來つた事を喜び、祭典當日祭壇前の舞樂を陪觀して、感涙の雙頬を濕すを止め得なかつた。是は余をして多年の傷懷を清算して、先靈慰藉の満足を表徴せしめた者といふべきであらう。

後年今の懷德堂の再興を觀るに及びて、余が先哲に對する責任は自然に解消して、己巳以來の殘愁も今は忘るゝばかりになつたのである。